

## 第 36 回 東日本大震災が起こった

---

2011年3月11日14時過ぎ、仙台医療技術専門学校と仙台医療福祉専門学校の卒業式に出席して、勤務先の仙台青葉学院短期大学に戻って一階にある自室で短大事務局員と打ち合わせ中に地震があった。自分自身ではこれまで経験したことがないような大きな地震で、5分～6分間位の長い間続くなかでとくに強い揺れが3回ほどあったように記憶している。後の気象庁発表では、14時46分18秒、震源地(断層の破壊が始まった地点:震央)は三陸沖(宮城県沖)約130km、深さ24kmで、マグニチュード9.0(当初速報では7.9)、最大震度7(宮城県栗原市)であった。仙台市青葉区では震度6強であったが、後に同市内でも震度7を記録した地域があったことがわかった。震源域(断層が破壊した領域)は、最終的発表によると岩手県沖から茨城県沖までの南北方向約510km、東西方向210kmと広範囲に及んだ。巨大地震後には大津波が発生し、停電中の暗闇のなかで聞いたその夜携帯ラジオ放送では聞く度に被災がとてつもなく大きいことが知らされた。仙台市若林区や宮城野区にも津波が押し寄せ、津波が引いた後の若林区荒浜に多数の遺体が残されているという放送があった。津波によって東北から関東に及ぶ太平洋沿岸のほとんどの市町村では甚大な被害を蒙り、多数の死者や行方不明が発生した。当日夜のラジオ放送では気仙沼市ではコンビナートの大規模火災が発生していること、岩手県陸前高田市が壊滅的被害に見舞われたことなどが次々と報道された。

筆者の住む青葉区では震災後停電が数日間続いたが、断水はなかった。ガス供給は4月7日の余震とみられる地震により予定よりも長引いたが約5週間で回復した。

3月11日以降日常生活状況は震災前とは一変した。殆どの対外的な行事や会議などは軒並み中止となった。街中には買い物袋を掲げた人やザックを背負っている人々が目立ち、スーパーマーケットやコンビニなどはもちろん食料品のありそうな店の前には例外なく人の列ができていた。24時間開いているコンビニの前には若者が多く並んでいることが多かった。聞くところでは若者たちはファスト・フードはもちろんのこと、タバコ購入のため並んでいるということであった。ガソリンスタンドにも順番が来るまで数時間といわれるような車両の長い列が延々と伸びているような日が続いた。仙台市は大地震のため鉄道や高速道路が不通となり、陸の孤島になってしまった感があった。そのような状況の街中で、商店で値上げする様子もなく毎日一定量の商品を商い続けた店が多かったことが印象深い。

震災発生から1週間程は夢中で過ごし、自分自身ではつらいと思ったことはなかったが、その間体重が2kg程減少した。10日後頃から脈拍がしばしば結滞するようになった。不整脈は1週間ほどで改善し、体重も今では元に戻っている。

東日本大震災後、余震とみられる地震が数え切れないほどの回数で続き、報道では4月8日正午まで震度4以上の余震は93回あったという。本震の4週後4月7日深夜11時頃激しい地震があり、丁度眠りが深い時で枕元の湯飲みが転がり落ちて中の水が飛び散ったのも知らずにいたが、揺れの激しさが増した時目が覚めた。本震の時とは違って揺れが激しかった時間は短かった。地震の時とつさに思い浮かんだことは、3.11地震の際かなり損傷が目立った宮城野区にある東北厚生年金病院のことであった。この病院は2000年から筆者が病院長を勤めた5年間に2回ほど比較的強い地震に見舞われたことがあり、その都度修復作業が必要な被害を被っていた。翌日問い合わせると地震の揺れが比較的激しい地区にあったにもかかわらず、病室の窓ガラスが壊れたところがあったものの病院の建物は無事ということであった。余震とみられるこの地震は、仙台市宮城野区と栗原市で震度6強を記録し、震源を牡鹿半島沖約40km、深さ66km、M7.1と発表された。青葉区では再び起こった停電は短時間で回復し、断水もなかった。翌日から普通の生活に戻ることができたが、4月7日の地震は3月の大震災よりも何故かひどく精神的に癒えた。

東日本大震災による大津波の影響が大きい岩手、宮城、福島、茨城、千葉などの太平洋側の各県では、港湾・道路・建造物・石油施設・農地・観光施設、さらに科学技術に関連した研究施設や公共施設などが軒並み甚大な被害を蒙った。最も深刻なのは、海岸近くに建設されていた福島第一原子力発電所が巨大地震の直後大津波をかぶり、損傷事故が発生したことである。修復作業が続いているが、損傷施設からは5月に入ってから未だ放射能漏れが続いており、連日のように様々な問題が発生し、終息する気配がない。大震災による人的被害は警察庁のまとめによると、4月25日現在全国で、死者14,300人(宮城8,644人、岩手4,154人、福島1,439人)、行方不明者11,999人(宮城6,913人、岩手3,514人、福島1,568人)であったが、5月25日発表でも行方不明者はまだ8,666人にのぼっている。

4月17日震災後不完全ながら通行可能になった道路を歩いて気仙沼市と陸前高田市の状況を見聞する機会があった。東日本大震災による被害のすさまじさは報道以上のものがあった。気仙沼市では大震災の津波が病院の施設に押し寄せ、胸まで海水に浸かりながら生き延びられたという開業医に会った。陸前高田市では大学の呼吸器外科で同門の県立病院の院長をしている外科医を見舞った。彼は勤務中に大震災に遭遇し、その後近郊のコミュニティーセンターに診療所を開設して医療を続けていた。

気仙沼市も陸前高田市もともに大津波でかつて人が住んでいた至る所には建物の残骸や瓦礫が大量にあり、平坦化している所は荒野のようで、その中を細々と道路が通っていた。瓦礫の下には今でも多数の遺体が発見されないまま残されているであろう。

東日本大震災で思ったことや感じたことなどを、幾つかランダムに思い出してみる。大震災に被災した人々についての報道から感じたことは、我慢強い、感謝の念が強い、他人を思いやる気持ちが強い、他人を思いやる気持ちが強い、不自由な現状に明らかな不満を表す人が少ない、などである。これらは東北人の特性の一端を示していると思う。震災後宮城県知事が真っ先に行った緊急対策は、港湾をいち早く使えるようにしたことと道路の整備を急いだことであった。古代ローマ、カエサルの「ガリア戦記」を思い出させるような迅速な対策によって、震災後、鉄道や幹線道路が寸断されて孤立した地域住民が、物資不足によって恐慌をきたすこともなく日常生活を維持できたと思う。

わが国に東日本大震災という大規模災害をひき起こした東北地方太平洋沖地震は、わが国の貞観(じょうかん)地震(869年)と震源域や地震に伴う大津波発生が酷似している。今回の巨大地震発生2日前に震源地のすぐ隣といってもよい数十km程度離れた地域を震源とする三陸沖地震(M7.3)がこの地震を誘発したとされ、さらに東北地方太平洋沖地震後の15時15分に発生した茨城県沖地震も巨大地震の余震ではなく誘発地震であった。

日本列島は大陸(ユーラシア)プレートや北米プレートの上に乗っており、その下に太平洋プレートやフィリピンプレートがもぐり込み運動をしており、年に数センチずつ動いていることが知られている。日本列島はそれらのプレートがお互いに押し合っているところにある。上になっているプレート(岩盤)にひずみが蓄積され、ひずみが一定の強さを超えた時、岩盤が破壊されて地震が起こる。上側のプレートともぐりこむプレートの境目は溝のようになるが、細長い溝状(凹状)の海底地底のうち水深6,000mをこえるものが海溝であり、水深6,000m以下のものがトラフである。地震発生因から3種類に分類されている。大陸プレートの跳ね返りでおこるプレート間(境界型)地震(東日本大震災をもたらした東北地方太平洋沖地震、1978年宮城県沖地震、1923年関東大震災をひき起こした関東地震など)、もぐりこんで行く海側のプレートの内部でひずみを生じた岩盤が破壊されて起こる海溝型地震(1933年三陸沖地震、2008年岩手県沿岸北部地震など)、もぐりこんだプレートが陸の内部でひずんだ部分が破壊されて起こる内陸型地震(阪神淡路大震災をひき起こした兵庫県南部地震、2008年岩手・宮城内陸地震など)である。日本列島は四つの大きなプレートが集中しているため、地震が起きやすい状態にあり、なかでもプレート間地震発生には数十年～数百年(東北地方太平洋沖地震をもたらした震源域に関しては37～400年と想定)の周期性があると

いわれる。死者 28 人を記録した 1978 年(昭和 53 年)の宮城県沖地震(M7.4)は、周期性から最近発生が危惧されていたが、このたびの巨大地震の発生によってその震源域が破壊されたのではないかという説がある。

東北地方太平洋沖地震では三陸沖から茨城沖までの日本海溝沿いの震源域が連動して、断層が最大 30 メートルずれたといわれる。また、巨大地震後海溝側の引く力が強まったため海溝側での岩盤破壊が生じる可能性があることから、将来さらなる地震の発生が危惧されている。東日本大震災も地震が発生した地域ではさらなる地震への備えが必要である。

日本列島やその近海には未だ多くの震源域が存在している。静岡県から四国沖に伸びる南海トラフや、北米プレートに太平洋プレートがもぐり込み運動をしている千島海溝がある。それらの海底大断層に沿って存在する震源域とする地震の歴史があることは、将来東日本大震災のような連動型大地震が発生することを否定できない。

東日本大震災における福島第一原発事故は危機管理の問題を提起したが、貞観時代の大地震と大津波のような史実を看過して原発が建設されたことが最近判った。この事故について今、思い考えることは筆舌に尽くし難いほどある。

大震災後の現在明らかなことは、地域社会の再生と災害地の復興には壮大なスケールの綿密な計画と、完成までの長期にわたる努力と忍耐が必要ということである。